

# 『伊勢物語』六十五段考

——後期章段的性格と成立時期——

井川健司

享受者が同時に作者となり得た伊勢物語の成長期（古今以後後撰前後）には、原形の数倍に及ぶ多数の小話が増益されたであろうが、その殆んどは既成の類話―主に和歌によりかかった男女間の心理表出―にとどまり、話としての個性には乏しい。その中にあって、四段を核とした一連の高子譚のひとつに位置づけられる65段は、勢語中最も長大かつ浪漫的內容をもつ章段として、特徴あるものとなっている。話は、左（定家本。後注は略す）

昔、おほやけ思<sup>おほ</sup>して使う給ふ女の、色許されたるありけり。大御息所としていますかりける従妹なりけり。殿上に侍<sup>まゐ</sup>ひける在原なりける男のまだいと若かりけるを、この女あひしりたりけり。男、女方<sup>むすめ</sup>許されたりければ、女のある所に來て向ひをりければ、女、「いとかたはなり。身も亡びなむ、かくなせそ」といひければ、

A 思ふには忍<sup>しの</sup>ぶ事ぞ負<sup>ま</sup>にける…逢ふにしかへばさもあらばあれといひて、曹司<sup>そうし</sup>におり給へれば、例の、このみ曹司には、人の見るをもしらで上<sup>のぼ</sup>りあければ、この女、思ひわびて里へゆく。……かくかたはにしつつありわたるに、身も徒<sup>た</sup>になりぬべければ、遂に亡びぬべし、とてこの男、「いかにせむ、わががかる心やめ給

へ」、と仏神<sup>ほとけがみ</sup>にも申しけれど、いやまさりにのみおぼえつつ、猶わりなく恋しうのみおぼえければ、陰陽師・神巫<sup>かみまじ</sup>呼びて、恋せじといふ祓<sup>はら</sup>への具してなむいきける。祓へけるままた、いと悲しきこと数まさりて、ありしよりけに恋しくのみおぼえければ……

B 恋せじと御手洗河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかなといひてなむいにける。この帝は、顔かたちよくおはしまして、仏の御名を御心に入れて御声はいと尊くて、申し給ふを聞きて、女はいたう泣きけり。……かかる程に帝聞し召しつけて、この男をば流しつかはしてければ、この女の従姉の御息所、女をばまかでさせて、蔵にこめてしをり給うければ、蔵にこもりて泣く。

C あまの刈る藻に住む虫の割穀<sup>わりこめ</sup>と音をこそ泣かめ世をば恨みじと泣きをれば、この男、人の国より夜ごとに来つつ、笛をいとおもしろく吹きて、声はをかじうてぞ、あはれに歌ひける。かかれば、この女は蔵にこもりながらそれにぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける。

D さりともと思ふ覽こそ悲<sup>かな</sup>けれあるにもあらぬ身を知らずしてと思をり。男は女し逢<sup>あ</sup>ねばかくし歩きつつ人国<sup>ひとくに</sup>に歩いてかく歌ふ

E いたづらに行きては来ぬる物故に見まほしさに誘はれつつ  
のとおりであるが、まず第一の特徴は史実を利用した人物設定であ  
る。在原氏の男と禁色を許された女、と言えば業平と二条后高子、  
その従姉の大御息所とは染殿后明子、従って帝は清和天皇、と系図的  
に誤りはない。また女の里を御息所邸とするのも史実「先是。皇太  
子(母・高子)誕於太政大臣東京染殿第一。是日移入于東宮。」(三  
代実録貞観11年2月11日)・「后(高子)以選人掖庭」。遂有身。  
……生帝於染殿院。」(同卷三十)に一致したもので、更に帝を傍線  
部の如く説明する部分は元慶4年の崩御の記事(三史)

天皇風儀甚美。端儼如神。……好読書伝。潜思釋教。

に叶うし、高子・業平の不倫の關係は勢語内での事実と言え、一応  
史実を取り込んで実話を装う。しかし反対に、高子より17歳年上の  
業平を青年(少年?)と設定し、畿内への配流という架空の刑罰を  
つくる事実も指摘できる。次に第二の特徴としては和歌が挙げられ  
る。此の段には五首の和歌が用いられるが、そのうち二を除いて四  
首(引用古今歌ハ基俊本)はいずれも古今集の恋に収められるもの  
である。A 503は読人不知の歌上句と615友則の歌下句

503思ふには忍ぶる事ぞまけにける色には出でじと思ひしものを

615命やは何ぞは露のあだものを逢ふにしかへば惜しからなくに  
を折衷改句したもの、またBは501読人不知の歌をそのまま用いる  
が、Aの本歌が503番ゆえA・Bは同じ巻に一首を隔てて並び、章段  
作者は一見古今の此の箇所を利用してストーリーを編み出したと疑  
われる。しかしAの下句やまたC(古今807)、E(古今620)歌は各  
々巻を異にするので、逆に、ストーリーを先に構えてそれに相応し  
い歌を、自家のものとする古今集歌より記憶を辿って利用し、一章

段を成したと理解する方が妥当である。そのことは、本文波線部が  
恋四718読人不知

718 忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけに人ぞごひしき  
に依ったものであり、章段中の和歌のみならず地の文にまで、古今  
の歌が利用される点からも言えることである。つまり65段作者は、  
勝手知った古今歌を自在に駆使して章段を構えたという事では、一  
方では史実を取り込んで事実めかしながら、他方では業平ならぬ古今  
他人歌を利用したり男の年齢や刑罰に架空の設定をして虚構を企て  
る、という手を使う。これは恐らく、勢語のこの時点での姿―その  
始発とは逆に、表面上業平を語りかつ業平と享受しながら、暗黙裏  
に非業平的なものの混在を常態と認める―を反映したもので、勢  
語中に勢語の享受態度が垣間見られる」と言えよう。

△ △ △

さて、史実めかしながら古今非業平歌を自由に利用するこの増益  
段(古今以後)は、いつ頃を下限として成ったものである。以下  
はその論議である。まず『豊蔭』であるが、この歌物語の前半部

大蔵の史生倉橋豊蔭、①口惜しき下衆なれど、若かりける  
時女の許にいひやりける事どもをかき集めたるなり 公事

騒がしうて、をかしと思ひける事どもありけれど、忘れな  
どして後に見れば②ことにもあらずぞありける。言ひ交し

ける程の人は豊蔭に異ならぬ女なりけれど、年月を経て返  
事をせざりければ、③まけじと思ひていひける。

1 あはれともいふべき人は思はえて身の徒になりぬべきかな  
女からうじてこたみこそ

1 あはれともいふべき人は思はえて身の徒になりぬべきかな  
女からうじてこたみこそ

2 何事も思ひ知らずはあるべきをまたはあはれと誰かいふべき

④ 早うの人はかうやうにぞあるべき。今やうの若い人はさしもあらで上來めきてやみなんかし。

① 宮仕へする人にやありけん、豊蔭ものいはむとて下に今宵はあれと……おなじ女に、いかなる折にかありけむ

4 唐衣そでに人目はつづめどもこぼるゝものはなみだなりけり女、かへし

5 つつむべき ⑤ 袖だに君はありけるを我は涙にながれはてにさ年を経て ② 上衆めきける人のかういへりけるに、いか許あはれと思ひけん。これこそ女は口惜しうもらうたくもあり

6 人知れぬ身はいそげども年を経てなど越えがたきあふ坂の関これを親に、この事知れる人の見せければ、思ひなほりて返事書かせけれ。母、③ 女に祓へをさへなむせさせける。豊蔭、大炊の御門<sup>みかど</sup>辺りなりける人に通ひける。人多かりける中に、男の、家の前を常に渡りて物もいはざりければ、

女  
8 雲居には渡るときけど飛ぶ雁<sup>かづ</sup>の声きゝがたき秋にもあるかな男、かへし

9 雲居にて声きゝがたきものならば ⑥ たのむのかりも近くなきなむ

の傍線部③に当該の投影を見ることが可能である。ところで「豊蔭」は、その冒頭部に勢語の影響が顕著に見られ、波線①「口惜しき下衆なれど」・②「ことにもあらずぞありける」には謙退卑下の

口物が、また③「まけじと思ひて」と一途な意地を示す部分には「いちはやきみやび」をする初冠段主人公への意識が窺える。更に④「早うの人はかうやうにぞあるべき。今やうの若い人は……」、と豊蔭を昔の若者と設定することにより当代の若者を批判するのは、明らかに初段末「むかし人はかくいちはやきみやびをなむしける」を做つたものである。これを言い換えれば、豊蔭は「翁」と設定されているのであり、ここでは略したが後半部に頻出する主人公を「翁」と言い現わすことと軌を一にして、全体を翁語りとする姿勢が明確である。これは勢語にあつては初冠段のみならず、やはり後半部に出現の主人公を「翁」とする姿勢と一致するものである。その他、全般的に助動詞「けむ」を多用し、語り手が主人公を突き放して距離を置く態度も勢語と共通する。また波線⑥「たのむのかり」は、勢語10段(和歌)に初出する語でそれを利用している。

以上、「豊蔭」が如何に勢語から強い影響を受けているか明らかである。そこで、このような状況を考慮しつつ豊蔭と小野好古の娘との交渉を語る記事に注目する。まず女は傍線①「宮仕へする人」・②「上衆めきける人」から品高き身とされ、それを「口惜しき下衆」の主人公が懸想する設定である。これは勢語の四段を核として広がる高子譚の「高き卑しき身の恋」の型、その中に65段が存在するのである。そして豊蔭がこの好古の娘「野内侍(後撰)」と初めて契つた折の、後朝の贈答歌が4・5番の歌であり、それを察して娘を責める親に対し、二人が謀つて「まだ逢坂を越えぬ」と偽り、歌(6番)で親の立腹を解く。作者は、傍線③「女に祓へをさへなむせさせける」と語って、実は「口惜しき下衆」豊蔭が「上衆めきける女」に恋するのを65段の禁色を許された女と在原氏の若者

との恋になぞらえ、宮廷に「あやにくな恋」を展開させたもので、そこから65段に同じく「(恋せじといふ) 祓へ」をさせる設定がなされること明らかになるのである。

ところで、『豊蔭』が一条摂政藤原伊尹の自撰とする定説に従った場合、此の作品は天祿三年(972年。伊尹薨)以前に成立となり、65段の下限もそこに一応定められる。しかし守屋吾氏(『蜻蛉日記形成論』)に依れば(筆者も同結果を得る)、本文冒頭「公事騒がしうて」及び末尾「公事忙しき頃にて」が天曆二年(988年。25歳)の任藏人を指すと思われるので、『豊蔭』の記事は此の時期までに経験され和歌が詠まれたことになる。しかし65段に影響された野内侍との恋愛譚は、「祓へ」の語が地の文にあり執筆時点で潤飾も考えられるゆえ同時期には定められず、『豊蔭』の成立年代を987年と考えておかねばならないと同様に、この作品を手掛りとする限り、65段の成立下限もその間としておかざるを得ない。

さて、次に当該の存在を窺わせる資料と考えられるのは、後撰集卷十四・恋四にある藏内侍の歌

好古朝臣に更よに逢はじと誓言ちかをして、又の朝あさに遣はしける

87誓ひても猶思ふにはまけにけり誰がため惜しき命ならねは

である。此の歌は、65段A歌が古今503上句と615下句とを折衷して作られる事と似た特徴をもつ。即ちその上句は、65段A歌上句つまり古今503上句の「思ふには忍ぶる事ぞまけにける」と意味内容及び表現語句に於いてほぼ同一であり、その下句は、65段A歌下句「逢ふにしかへばさもあらばあれ」及び古今615下句「逢ふにしかへば惜しからなくに」と表現語句は異なるものの意味内容に共通性をもつ。ところで、65段A歌は古今503上句・615下句をほぼそのまま折衷す

るゆえ、A歌が古今両歌から成ったことに間違いはなく、藏内侍の歌に依拠したと考えなくてよい。従って問題となるのは、藏内侍の歌が古今両歌に依ったものか勢語65段に依ったものかを判断することである。そのポイントとしては、藏内侍の歌の詞書にある「……更に逢はじと誓言をして」という部分があげられる。「更に逢はじと誓言」をした作者は、「猶思ふにはまけにけり」つまり「思ふには忍ぶる事ぞまけにける」をなぜ想起したのか。それは二度と逢うまいと誓っても逢いたさに耐えられなくなった、そこから同じ思いの歌が想起されたと考えられる。しかし古今503

思ふには忍ぶる事ぞまけにける色には出でじと思ひしものを、秘めた恋心が人に気付かれるまでになった歌であり、これに対し65段は「恋心が人に気付かれるか否か」の問題とは次元を異にし、命を捨てても逢わずにいられぬ若者の、抑え難い思いを詠うものである。従って歌意の一致という点から、藏内侍の歌は65段に基づくことみなされる。

その他には、貫之集の屏風歌に65段の存在を思わせるものがある。その歌は「承平七年依仰奉之」と詞書する屏風歌四首(春二、夏秋各一)中の夏歌(六月祓)——本願寺本——

236つらき人忘れなむとて祓ふれば靉ぐかひなく恋ぞまさされる  
で、上句は65段の、「女が次々と居所を替えて逢うことを避けるのを男がその都度追ひ、果ては「わがかかる心やめ給へ」と祓えをする」部分を引き写した如くであり、下句は「祓へけるままにいとど悲しきこと数まさりて、ありしよりけに恋しくのみおほえ」たことを言い表わしたと思わせる内容をもつもので、65段に一致しすぎる程の歌と言える。勿論この貫之歌は、B歌(古今501)とも近似する

ので、古今を参考にして成った可能性もある。但し65段は古今の歌を使うゆえ、問題はこの貫之・屏風歌が古今或いは65段のいずれに關係するか、にある。ところで貫之集には、六月祓の歌（皆屏風歌）が計十二首（236・247番は本願寺本、他は歌仙本）

11みそきする河のせみれはから衣もゆふくに波そ立ける

37住の江のあさみつ塩にみそきて恋忘草つみてかへらん

107此かはにはらへてなかつことのはは浪の花にたくふへらなる

132大幣の河の瀬ごとになかれても千とせの夏はなつはらせん

286あひたなくよする河なみ立かへりいりても猶あかすそ有ける

※236つらき人わすれ南とてはらふれば身そぐかひなく恋ぞまされる

247はらへてもはらふる水のつきせねは忘れがたき恋にざりける

394みそきつゝ思ふ心は此川のそのふかさにかよふへらなり

406河やしらしのにをりはへほす衣いかにほせはかなぬかひさらん

473行水のうへにははる河やしろかは波たかくあそふなるかな

517玉とのみみなれみたれて落たきつ心きよみや夏はらへする

526うき人のつらき心を此川の波にたくへてはらへてそやる

収められるが、この詠作年代順に並べた一連の歌には興味ある現象が見られる。それは問題の236番を境としてそれ以前の歌に祓えと恋とを結びつけたものがなく、勢語65段との關係が考えられる236番から恋と結びつく祓えの歌が七首中五首（又は六首）も出現していることである。勿論前半部37番歌には恋忘草とあって祓えと恋とが存在する。しかしこれは元来、住江が祓の場所として有名であり、また

同地は万葉（114）や古今（111）。万葉114の類想歌）

1149住吉に行くとき道に昨日見し恋忘貝言にしありけり

1111道知らば摘みにもゆかむ住江の岸に生ふて恋忘草

に歌われるように、住江と恋忘貝（草）とが結び付くゆえに祓と恋とが揃ったもので、発想自体は別個のものである。また132番歌は一見尽きぬ煩惱を詠むと思われるが、「皇大神宮年中行事」神事歌

59六月の夏越の祓へする人は千歳の命延ぶとこそ聞け

に見られる如く長命を祈願する歌で恋歌ではない。従って前半の歌

11・37・107・132・236番（延喜・延長年間）は、236番以下とは確かに

違いを見せている。一方後半の承平、天慶時代の歌は236番から始ま

って247・394（深き思ひ？）・517・526番と祓えに恋を結びつけた内容をもち、406番は一説恋歌なのでこれを加えると、473番以外は皆「祓

えと恋」で詠まれたものとなり、前半部に比べると際立って特異な現象を呈す。この原因は如何に考えればよいか――。

65段のB歌「恋せじと」は元来古今の歌であるから、前半の祓え

の歌が詠まれた延喜・延長年間にも、貫之は祓えと恋で詠作できた

善である。しかしそれをしないのは、恐らく祓え自体が迷蒙を払拭

する手段として、むしろ日常的に恋と結びつくものだったので歌材

として珍しくなかったのである。そこで考えられることは、恋の

祓えを詠み始めた承平七年の236番歌が65段の内容に一致し、以後頻

繁に祓えと恋を詠むことから、此の歌が作られた承平年間には65段

が成立流布しており、それに興味をもった貫之が歌に採り入れたと

いうことである。右の特異現象は、こう考えることによって初めて

合理的な説明を得る。

以上、65段の成立下限を三種の資料を用いて探ったのであるが、結論として、65段は後撰を遡って成立していたと言える。

最後に、65段の内容と配列位置との関係を考える。当段は四段を核とする高子譚とそれに続く東下りを因果の関係で捉え、それを一章段にまとめて構成されるが、それは章段内にとどまらず、外部の隣接諸段とのかかわりに及んで実現されている。すなわち、六六（撰津）67（和泉）68（和泉）段は男が親しい者達と畿内を逍遙する話、六九段は狩の使（伊勢国）でいずれも地理的に連続し東への志向が見られること、また内容的には六六段

昔、男、津の国にしろ所ありけるに、兄・弟・友だちひきゐて難波の方にいきけり。渚を見れば船どものあるを見て、

難波津を今朝こそみつの浦毎にこれやこの世をうみ渡る船これをあはれがりて、人々かへりにけり。

が世を厭う話（波線部）であつてともに東下りのイメージに結び付くことからこれら章段の前に65段を配置させ、高子との恋とその失恋による東国への流浪<sup>ウツロ</sup>という物語初部のパターンを実現させたものである。また別に、65段の畿内流罪という架空の刑罰が、実は六六段以下の畿内逍遙章段に繋げることを考慮した結果の発想でもあることが判る。また当段の前の64段

昔、男、みそかに語らふわざもせざりければ、いづくなりけむ、あやしさによめる。

吹く風にわが身をなさは玉簾すだれひま求めつつ入るべきものを返し、

とりとめぬ風にはありとも玉簾すだれたが許さばかひま求むべきは、「いづくなりけむ」・「玉簾」の言葉から後宮に於いて男が物のまぎれにより女と契つたと解されるが、それに続いて65段が位置すると、前段は65段の「殿上に侍ひける在原なりける男の、まだい

と若かりけるを、この女あひしりたりけり。」を物語ったとの読みが成り立ち、丁度四段に対する3段（後注をまたずとも、むぐらの宿・引敷物ひきぢものに袖をしつつも、にて男を自己卑下させるので、女を次段の高子に擬していることがわかる）の役割を果たしている。

こう見てくると、65段は章段自体及びその隣接諸段との関連において、高子譚とその結果による東国流離譚とを二重に再現させていることが明らかで、そこから後撰に至る時期の物語初部配列構造及びその享受の姿が判然と窺えよう。またこの一連の章段をみると、65段が六六段以下に連続させる意図が見られるのに対し、六六段・68段は「これをあはれがりて、人々かへりにけり。」・「ただひとりよみける。」・「……とよみければ、みな人々よまずなりにけり。」とする男の歌誉め章段であり、65段とは章段意図に明らかな差があつて65段を意識した痕跡が見られず、更にこれら紀行段がその地理的関連から古今業平歌章段である六九段に隣接して配置されたと解釈されるゆえ、配列からみても65段のより後期の成立が確かめられる。それにも拘らず、成立時期が先の資料に見る如く後撰以前であることは、古今以後の勢語が予想を超えて急激な増益成長を遂げていたことを物語るものと言える。